

日本地下水開発(山形)参加

タジキスタン 冷暖房システム構築



完成した井戸に配管をつなぐ日本地下水開発の社員ら＝昨年12月、タジキスタン（同社提供）

首都ドゥシャンベの政府施設で地中熱を、病院で地下水を熱源としたヒートポンプ式の冷暖房で、同社は熱交換用の井戸の掘削を担う。首都でも停電が頻発し、23、24年に深さ約100メートルの井戸を掘った。先月下旬から今月上旬、桂木社長らが現地を訪れ、異常が

熱交換用井戸掘り完了

日本地下水開発(山形市、桂木聖彦社長)が参加している、中央アジア・タジキスタンでの地中や地下水の熱を活用した冷暖房システム構築の国家プロジェクトで、同社が担当した熱交換用の井戸掘りが完了した。早ければ今月末から冷房の試験運転ができる見通し。エネルギー資源に乏しく、電力供給が安定していない同国で、豊富な地下水源を生かした取り組みは、着実に前進している。

代の社員7人は、たくましく成長した」と収穫を口にする。

政府施設と病院でのデータを取った同国政府が取り、国内での普及を検討するという。桂木社長は「ようやく

今月末から試験運転も 地下水源活用 広がり期待

ここまで来た。責任は果たせたと胸を張り、「豊富な地下水源を生かした省エネルギーの冷暖房システムを、広めたい」と期待を寄せる。

同国は夏は40度を超え、冬は氷点下20度を下回ることもあり、寒暖差が激しいが、冷暖房に活用できる地下水資源は少ない。そこで、プロジェクトでは、いずれも年間を通して温度が15度程度と一定の地下約100メートルの地中熱と、豊富な地下水を熱源として利用したシステムの構築を目指している。

科学技術振興機構(JST)を中心に22年に始まり、27年まで同国政府と連携して取り組む。この冷暖房システムの構築と普及で、産業化や雇用創出なども目指している。秋田大が日本側代表を務め、同社の他、日本の大学や企業、タジキスタンの政府機関などが参加している。

(上村耕平)

©山形新聞社 無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します